創刊の詞

永井彦熊

本会が設立されましてから既に四年の年月を閲し、其の間十回に余る各地の史跡調査を挙行致しました。町村各位の理解と絶大なる援助とは会を追う毎に盛大に赴き、遂に今回待望の史談会誌を発刊するの機に恵まれたのです。

由来我が大隅が襲の国と称し、又日向と変つて古代文化の華を誇つたことは今日に残る幾多の豪壮な古墳群にても想像がつくのです。朝廷に於かせられても、大隅隼人として累世禁門の衛に任ぜられていました。

斯くの如き民族が何故に微々として振はず文化に恵まれなかつか、静かに大隅古代史を探求してみます時、それは数々の理由もあつたでしょうが、景行天皇の御親征につぎ奈良時代に於ける大伴の旅人征隼将軍の殲滅的な討伐により叛亂の巨魁に引きずられて無辜の民が巻きぞえを喰うたことであります。

降つて、近世に肝属、祢禰、伊地知氏等の滅亡に伴う民衆の流離であります。

史上吾が大隅の民族は此の三大変遷の為にあつたら文化の地も蕭条満目只鷓鴣の飛ぶ様な荒野と化したのです。然し民衆は蹂み躙じられても道草の様に芽を出し可憐な花をつけました。

惟いますに、神武は大久米の市一族を率いられて大和建設の為に吾が大隅を後にされました。

原爆の洗礼を受けました日本民族が再起の理念を萌蘖せしめますのは、古代文化創造民族の子孫として文化を追求する吾人に課せられました天賦ではないでしょうか。

春風秋雨二千年、大隅文化の華を再び咲かしめる機は既に到来しているような気がいたします。

終わりに史談会及史談会誌発刊に対し心からなる御援助を賜つた各位に対し深甚なる感謝の意を表します。

（大隅史談会長）

創刊祝辞

大隅史談会の発展を祈る

永田良吉
（大隅史談会名誉会長　代議士）

祝辞

皃島静男

「温故知新」という言葉は日本再建の途上にある我々としては更めて深考熟慮すべき時期にあると思う。三千年来軍国、封建的に培養されたあげくの果てに主権在民、戦争放棄、自由主義、人権尊重などを織り込んだ夢のような、驚くべき憲法下におかれた我々として、考えなければならぬことは、古いといっても、よいものだけは残し、新しいものからも、良いものだけをとり入れて、而して、明るい、自由な、平和な、清新な日本を建設すべきと思うが、史談会の真意義もそこにあると思う。

史談会の発刊を祝し今後スクスクと成長することを祈念致します。

（大隅史談会名誉会長　鹿屋市長）

発刊を祝して

田中茂穂

時は悠久の流れであります。現在は過去の集積されたものであると同時に未来への出発点であります。未来に生き、而もその未来に躍進と栄誉とを堵ける民族にとつて、現在に対する適確な認識は不可欠であると思います。

過去の集積である現在への認識は即ち過去の歴史への探求であり、反省でならなければならないのでありますが、私共は歴史が一人の偉人の秀れた才能によつて形成されたものとは考えず、寧ろ一人の偉人をはぐくみ育てた時代、その時代に生きた名もなき数知れない民衆が、歴史を形成することを信じるものであります。

我が鹿児島県は国史全体の上からも、更には地方史的な取扱の上からも、他地方に較べて特異な位置を占め、最も研究を要する地方であつて、例えば本郡に於けるその古墳群は古く邪馬台国との交流のあつたことを、実証するものとして地中の書ともいえるものでありまして、それだけに本郡の史実の究明は貴重な研究であります。

幸いにして本会が早くより結成され、その研究の一翼を担われて早や四年の年月を経過し、更に今回会誌発刊に至りましたことは、本郡出身の一員としてまことに御同慶に堪えないところ

であり、名も知れぬ幾多庶民の歴史が会員諸賢の御努力により、巷間広く知らされ、民族の歴史の解明が尚一層の具体性を持つことを、心から念願いたしまして発刊のお祝とする次第であります。

（鹿児島縣議会議長）

創刊を祝して

勝　目　清

史談会誌を御発行になる由、真に愉快に堪えません。当方としても計画だけは持って居ますが未だ実現されない処です。二十年位前には当方でも発行して居まして、其のパンフレットが今でも非常に役立つて居ます。時々参考にして居るのです。書いて残すことが何よりも必要であります。是非拝読致し度いものです。

（鹿児島市長　鹿児島史談会長）

史談会の発展を祝す

内倉実幸

大隅史談会が発足してから四年になります。この会が年と共に発展している姿を見まして、私は発起人の一人として心からよろこんで居ります。凡そこのような文化的な会や行事は始めは景気よく出発するものでありますが、大抵は二年か三年と経つうちにいつのまにか消えて失うものであります。

然るに本会が既に三年を経過しても微動だもせず益々隆盛にむかつているのは、会員各位の学問に対する情熱の然らしむるところでありますが、更に当発起人として活動された永井彦熊先生が終始一貫誠意を以て世話して下さるその結果であると思うのであります。

大隅の文化に就いては、すでに或程度学会にも紹介されていますが、まだまだ表面的な調査研究に過ぎず、貴重な文化財はまだ相当埋もれていると思うのであります。この様な埋もれた文化財や民俗資料を発見し紹介して本県の文化発展のために奮斗される会員諸賢の熱意に対し深甚の敬意を表する次第であります。本県に於いては昨年六月文化財保護条例を定め、文化財専門委員を依嘱し県文化財の保護活用につとめています。最近は県民の文化財に対する認識が深まり、各地にこうした史談会や研究会が催され、また郷土芸能、民謡なども目覚ましい発展を見るようになりました。すでに御承知の事と思いますが、大隅地方の文化財で重要文化財として指定されたものは次の通りであります。

国指定のもの＝横瀬古墳群（大崎）。唐仁古墳群（東串良）。塚崎古墳群（高山）。佐多旧薬園。高山城跡（高山）。宮ヶ原庭園（志布志）。平山氏庭園（志布志）。蘇鉄自生地（佐多）。ヘゴ自生地北

限地帯（内之浦、根占）。枇榔島熱帯性植物産地（志布志）。塚崎の大楠（高山）。志布志の大楠。銅鏡（都万神社）。銅鏡（山宮神社）

縣指定のもの＝勝軍地蔵（垂水）。大慈寺宝物（志布志）。かわごけ草（志布志）

（鹿児島縣社会教育課長）

創刊を祝す

最上　宏

凡そ夢なき生活は動物の生活である。而て夢は或意味に於いて理想であり思想であり歌であり詩であり又文である。而て文が化して実現したのが文化とも考えられる。千数百年前のローマの英傑シーザルは「思想は世界を支配する」と、確かに名言である。今や米国を代表する思想と、ソベート露国を代表する思想が現世界を支配して居る。又英国の文豪カーライルは「現実は思想の影なり」と、至言である。例えば農村に行き其田畑の実相を観よ、正しく其作人の思想を如実に反映して居るを感ずるであろう。

又世界文化の現実は、世界に人類出現以来彼等の夢の実現の総重積である如く、我国に於いても新石器時代人渡来（稲荷台式石器使用者渡来は今より七、八千年以前）以来我等の先人の夢の実現の重積であり、従つて我等の現在は夫等の長き過去の延長であり、而て将来に到来する未来は所詮我等の過去現在を貫く一線の延長であらねばならぬ。

嘗て或史家が云つた様に今日の文化は過去の如何なる時代でも一世紀を取去るならば一世紀退却するとは其通りである。

茲に歴史は樹木に例えるなら其地下根であり、六百年を経たる樹木には六百年の地下根がある事を忘れてはならなぬ。

又我々は創作なき人生は死の人生であると考える。彼冬枯れの草木が一陽来復して山野は若返り若葉青葉に被はれ面目一新しるのは彼等の創作によるのである。

惟うに我等の先人が長年月間の過去を地下根として生々成育して今日の文化のバトンを我々に譲りたる事を思う時、我等は此過去を基礎として奮励一番大なる創作なき能はずである。而して此創作が我国再建の基調である。否な再建其ものであらねばならぬ。

今日我々が過去を顧み歴史の探求に没頭する所以のものは他にあらず、全く我等の先人の夢と創作が今日の文化を育成したるかを偲ぶと共に吾等の創作と建設の資料たらしめむと思うからである。古人が温故知新や稽古照今の文字を書き遺したる所以も亦茲にありと思うのである。

而して茲に大隅史談会発足以来四ケ年其基礎強固となり、更に百尺竿頭一歩を進められ、愈々史談会誌の創刊を見るに至られ

たることは誠に慶賀祝福に堪えざる一大痛快事として御喜び申し上ぐるものである。　（熊毛史談会長）

創刊の言葉

北田　武盛（鹿児島縣町村会会長）

大隅史談会会誌発刊を喜ぶ

坂口　助次郎（吾平町長）

創刊祝辞

伊地知　四郎（高山町長）

発刊を祝す

松留　清（東串良町長）

創刊の祝辞

前田　栄吉　竹之内　慶三（百引村長及助役）

大隅史談会誌創刊の辞

坪内　作之亟（垂水町長）

大隅史談会報発刊の喜び

上原　哲哉（教育出張所長　史談会副会長）

創刊を祝して

有島　善男（鹿屋市教育長　史談会副会長）

発刊を祝して

牛留　政義（高山町教育長）

発刊を祝して

鶴田　静麿（大隅史談会顧問支部長　百引教育委員長）